

「聖典に親しむ会」資料

大阪・沖繩班

(木本まゆみ・佐々木常和・杉田久美子・金栴順子)

『浄土論註』(『真宗聖教全書 一 三経七祖部』二九五p～二九七p)

範囲「大乘善根界：経論則会」

「聖典に親しむ会」資料

テキスト『解読浄土論註』改訂版(箕輪秀邦編)・担当箇所p七四(木本まゆみ)

『浄土論』

「大乘善根界」 (読み下し) 大乘善根の界

『論註』

「此四句名莊嚴大義門功德成就

門者通大義之門也大義者大乘所以也

如人造城得門則入得生安樂者是則成就大乘之門也」

(読み下し)

此の四句は莊嚴大衆功德成就と名づく。

門とは大義の門に通ずるなり。大義とは大乘の所以なり。

人城を造って門を得れば則ち入るが如し。

若し人安樂に生ずるを得れば、是れ即ち大乘之門を成就するなり。

〔解読〕

この四句は莊嚴大義門功德成就と名づける。

門とは大義の門に通ずるということである。大義とは大乘の所以のことである。

たとえば人が城を造った場合、門が完成すれば中に入ることができるように、

もし人が安樂國に生まれることができれば、それが大乘の門が完成したことになるのである。

問い

・なぜ「門」が出るのか

・門とは何か

・門はどこにあるのか

・門はいつ開くのか

・だれが門を通るのか

・「若し人」という「人」はだれか

考察

・門に入るのではなく、「安樂に生ず」れば「門を成就する」とはどういうことか  
・「修五念門」という門と、この門とはどういう関係があるのか

・なぜ「門」が出るのか

大乘善根「界」↓世界をわける

閉じる↓分ける界 / 開く↓そこへ通ずる道

向かわせる手立てとしての門

・門とはなにか

門は、その世界に入るために、想定される目印、標識

門の前で問われる

連想 A .. 入国審査

門は、何を入れて、何を入れないのかを示す場所

門が明確になるとき、向かう道が成り立ち、歩みの方向と意義がうまれる

連想 B .. 「同心一体」(住岡夜晃先生)

自力の行者の否定、自身の問題があぶり出される

連想 A は、親鸞聖人の見方では仮門となる

門は、入って、しかも出るどころ

浄土に入る 生死を離れる / 浄土を出る 生死の世界に入る

自利利他成就の示唆

・門はどこにあるのか

門は常に内から開かれ、開くか閉じるかはその世界が決定する

「大義とは大乘の所以」 十方の迷いの者に向けて開かれる

浄土は西岸にあるが、浄土の門は東岸にある(曾我先生)

手渡す 相手の根機、問題意識をとおして自らを表現(宮城先生)

八万四千の法門 — 仮門

・だれが門を通るのか

「若し人」と提起

・「若し人」という「人」はだれか

「若し人」⇨安樂世界の外にいる人、群萌

大乘の精神は、外なる者を発見し続け

外なる人が自身の問題となり、それを引き受けてきた、転法輪の歴史

・門に入るのではなく、「安樂に生ず」れば「門を成就する」とはどういうことか

安樂…菩薩の慈悲・正観の由生、如来の神力本願の所建。

業繋の長き維（つな）これより永く断つ。（清浄功德）

国土莊嚴おわりの3種「無諸難」↓「大義門」↓「所求満足」||信心↓唯除↓自利利他

『教行信証』では信巻から証巻への展開にあたるか

「難治の三病」における『般舟讚』からの引用

「月愛三昧、よく衆生をして善心開敷せしむ」

門が成就するとは、我執が破られることか

・「五念門を修する」という門と、この門とはどういう関係にあるのか

「善男子・善女人、五念門を修して行成就しぬれば、…見たてまつることを得」（解義分）

「この間の仮名人のなかにおいて五念門を修するに…」（総説分）

「いかんが依るとは、五念門を修して相応するがゆえなり」（成上起下）

「善男子・善女人、五念門を修して行成就しぬれば、…」（起観生信章）

「菩薩はかくのごとく五念門の行を修して自利利他す」（利行満足章）



「聖典に親しむ云資料」

浄土論註、大義門功德

2024.5月 佐々木常和

「大乘善根の界、等しくて譏嫌の名無し、女人及び根欠、二乗の種は生ぜず」

【読み下し】

仏本なんがゆゑぞこの願を興したまへる。ある国土を見そなはずに、仏如来・賢聖等の衆ましますといへども、国、濁せるによるがゆゑに、一を分ちて三と説く。あるいは眉を拓くをもつて諂りを致し、あるいは指語によりて譏りを招く。このゆゑに願じてのたまはく、「わが国土をしてみなこれ大乘一味、平等一味ならしめん。根敗の種子畢竟じて生ぜじ、女人・残欠の名字また断たん」と。このゆゑに「大乘善根界 等無譏嫌名 女人及根欠 二乗種不生」といへり。

【解説】

仏はもと、どうしてこの願いを興されたかというところ、ある国土をみられるに、仏如来・賢者・聖者などの衆がおられても、国が濁っているから一乗を三乗として説かれている。また女人が色目をつかうことによつて、悪くいわれるような事態がおこつたり、口の不自由な人が指語するのをみて、それをそしつたりしている。

だから願つて、我が国土はことごとく大乘一味、平等一味であらしめたい、また芽を出す力のない種子(二乗)は一粒だにも生ぜしめず、女人とかかんかん感官の機能がそこなわれている者とかという名字(よびな)(による差別)も絶やしてしまおう、といわれたのである。

だから「大乘善根の界、等しくて譏嫌の名無し、女人及び根欠、二乗の種は生ぜず」といわれているのである。

宮城頭師によつて、女人、根欠、二乗の大体の内容を捉えておいて、考究を進めたい。

女人・・・女人性であつて、女のことではない。相手に媚びへつらう。歩みに於ける弱さ、常に中途なるもの。自己幻想に浸り、自分に夢見ることの出来る存在。自らの夢に酔う、求めているという自分に夢見て。問い続けることが出来ない弱さ、不徹底さ。

根欠・・・問う心、苦悩する心が欠如している。苦悩が眞の生命に目覚める手がかりであり、縁であるが、そういう一切の縁を失つて気晴らしに流れ去る。救いからもつとも遠い存在は本当に苦悩しないということであり、苦悩に徹することが出来ない存在である。問う心を持たず、悩むことがなく、ケロッとしている。他の人となつたことがないから、つまりは、相手を理解することが出来ない。故に相手の業というものに頭がさがらない。断絶の自覚、存在の重さを実感できない。問題の重さ、存在の重さに対する感覚が欠如しているのである。

二乗・・・(声聞、縁覚) 絶対者のことばにすがつて生きる。人間の事実から佛法を問い返すことなく自己の救いに浸り、閉鎖性に閉じこもる。菩提心から退没したあり方である。二乗を代表して声聞があげられている。

五種の声聞 ①決定声聞（小乗の悟りを得るもの） ②上慢声聞（未だ証らざるに得証せりと想うもの） ③退大の声聞（退転者） ④応化の声聞（声聞根性に応えるために声聞の姿をとる） ⑤大乘の声聞。

声聞性を表すのは②の上慢の声聞、「未証想得証、」③退大の声聞、（退没者。菩提心において退没したあり方）である。

事実を事実として引き受けられない弱さ、問題を感じる感覚が欠如している根欠、他の存在には関心が向かない二乗（自己容認、宗教的エゴイズム）、共に苦悩しない存在。地獄は苦悩が私を動かすものになるが、二乗に墮すれば、もう求道の歩みは止まる。墮二乗は厭うたよりを全く失ったもの、求道者の死である。罪業性に気づけないのが謗法、最も自覚から遠い存在。迷いの中にあつて迷いに気づかず、苦悩の中に在って、苦悩出来ない、人間の悲惨さ、その代表的な存在が、女人・根欠・二乗。苦悩することから、最も遠い存在が、大義門功德で押さえられている。

大義門は、大乘、全てのものが、入れる門、全ての者を入れんとする大乘門。女人・根欠・二乗は、佛道から最も遠い、救われる手掛かり無きもの、つまり謗法、一闡提と等しい。どうしようもない。そのようなものが救われるという所に大乘門の意義が完成するということ。

**人城を造って門をうれば即ち入るが如し。** 門をうるならば、もうおのずと行者の不可思議の利益にあずかる。門を得ればとは、門は外からこじ開けるものではない。衆生のもとして佛法の世界を開いたものが門である。相手の根機、相手の問題意識を通して自らを表現する、門は、表現であり、手渡しである。それぞれの根機に応ずる。門は八万四千、八万四千は、人間の煩惱の数。人間の煩惱に応えて道が開かれる、というのが門であり、浄土を建立された仏の願心を象徴的に表現した国土莊嚴17種の一つとして、大義門功德が挙げられている。

**根敗の種子畢竟して生ぜず。大乘善根界、等無譏嫌名・女人及び根欠・二乗種不生と言えり。** 浄土には根欠・女人・二乗等、存在がないだけでなく名もないのだと。種子は、不生起、その種子が生起しない、現行しないということ。

女人・根欠・二乗が、ひとたび浄土に生まれるならば、そのことが大乘の門を開くことになる。もともと救いから遠い声聞が、而も浄土の住人とならしめられるという所に、浄土の大乘一味にして、平等一味性が、証明されているのだと。佛法から最も除かれる存在が、国土の正機であると。

唯除という所に、欲生、つまり召喚の声が響く、そこに、佛の欲生心の展開がある。唯除の自覚において、召喚の勅命に頷かされる。唯除の文が欲生心成就なのだ。大義門功德は、唯除の文という意味を持つ。そこに大乘という意義が根源的に成り立つ。つまり真実一乗成就です。女人・根欠・二乗という存在に応えるという所に、安樂国土という国土の問題がある。国土とは欲生心成就の世界です。存在がその勅命にふれる場なのだ。

五念門の歴史を通して佛は苦悩の衆生、どうしようもない存在に出会う。苦悩の群生を見出し共に誓うところに回向という意味がある。そのものが救われなければ、じぶんが救われないという、そういう存在に出会う、一切の苦悩の衆生、大経では群萌、それが今大義門功德では具体的に女人・根欠・二乗という言葉で出されているのだ。

苦悩の衆生とあるが、これは佛が見出した衆生であって、衆生そのものは苦悩しない、真に苦悩しうるものは菩薩であって、我々はいつも問題を流してしまい、苦悩にも、歓喜にも徹することが出来ない、曖昧模糊としたあり方、何事にも徹しきれず、何をしても信仰すらも気晴らしになってしまう。人間にとって、真に苦悩すべきことは、何事にも、本当には苦悩し得ないという事実、そのことを真に苦悩すべきである。苦悩こそが真の生命に目覚める手がかりであり、縁でもあるのに、一切の縁を失って、全てが曖昧模糊として、気晴らしに流れ去る。真に厭うたよりを持たない、悲惨さがある。

女人性は佛道を歩むうえで弱い、問題を抱え得ない弱さ、何も悩まず、苦悩し得ない、問題を感じずる心が欠如している根欠。佛者にすがって、自分で歩もうとしない、吾は得たりと自分の救いに腰を

おろして他の苦悩などに無関心な声門根性、深く自覚しなければ、佛道にならないことを心得るべきであるのに、雑縁に好みて近づき、気晴らしの日々、どうしようもない自分を痛み入ることです。

問いにもならないのですが、救われることから一番遠い存在なら、謗法をあげればいいのに、なぜ女人、根欠、二乗をもって、大乘門とするのか？ 求道における弱さ、問題を抱えることが出来ない、我得たりと自己に夢見て、問題を感じることなく、悩みを持たない存在など、謗法という言葉に包めないような問題を具体的に明らかにするために、女人、根欠などを挙げられたのではないか。女人性、二乗性は、龍樹によって取り上げられているが、根欠は、後に一闡提として善導、特に親鸞聖人によって、重く取り上げられていくが、すでに、そのもとは、浄土論、論註に取り上げられていた。天親はどのようなことからこのような深い自覚に至ったのであろうか。

「同胞は如来から賜った私の宝である」と、夜晃先生から拜まれた先輩のお同胞によってお育てを受け、そのような念仏者になりたいと、目標にして歩んできた。そして念仏申せるまでにお育て頂き、佛法に会えたことを喜んでいるが、念仏申してもそれほど大したことに思えない我が事実。青年部会で、佐野師によって、真宗の救い、それでいいのですかと、ご破算にされた。

夜晃先生はじめ光明団サンガにお育て頂いたこと、ご恩徳に感謝にする心は事実であり、先輩のそうした尊い姿に感謝し同慶することも事実、有難く思うことしきりである。けれども、そのゆえに、ご破算にされて、私の念仏生活を問い直す大事な有難い時間を頂いた。女人・根欠・二乗こそ私の事であったと、論註大乘門の教えが新しく厳しく迫ってくるのです。

「聖典」に親しむ会資料

「解説浄土論註」改訂版(箕輪秀邦編)担当箇所：p七六 (担当：杉田久美子)

【原文】「問日案王舎城所説無量壽經法蔵菩薩四十八願中言

設我得仏国中声聞有能計量知其數者不取正覺是有声聞一証也」

〔読み下し〕「問うて日わく。王舎城所説の無量壽經を案ずるに、法蔵菩薩四十八願の中に言わぬ。設い我れ仏を得んに国の中の声聞、能く計量有りて其の数を知らば正覺を取らじ、と。是れ声聞有る一の証なり。

〔解説〕…（現代語訳）問い。王舎城で説かれた『無量壽經』（大經）をひもとくに、法蔵菩薩の四十八願の中にいわれている。「たとい私が仏となつても、国の中の声聞にかぎりがあつて、その数を知るようであれば、正覺（さとる）ことをしまい」（第十四願）と。これは安樂国に声聞が存在する第一の証（あかし）である。

「又十住毗婆沙中龍樹菩薩造阿弥陀讚云超出三界獄目蓮花葉声聞衆無量是故稽首礼是有声聞二証有也」

〔読み下し〕又十住毗婆沙の中に、龍樹菩薩、阿弥陀の讚を造りて云わく。三界の獄を超出して、目は蓮花葉の如き声聞衆無量なり。是の故に稽首礼す、と。是れ声聞有る二の証なり。

〔解説〕また『十住毗婆沙論』のなかで、龍樹菩薩は阿弥陀仏を讃える偈（うた）を造つて云われている。「三界の牢獄を超え出て、目が蓮の花びらのような声聞の人々はかぎりなくおられる。だからうやまつて礼拝する」と。これは声聞が存在する第二の証である。

「又摩訶衍論中言仏土種種不同或有仏土純是声聞僧或有仏土純是菩薩僧或有仏土菩薩声聞会為僧如阿弥陀安樂国等是也是有声聞三証也」

〔読み下し〕又摩訶衍論の中に言わく。仏土種種不同なり。或は仏土有り、純に是れ声聞僧なり。或は仏土有り、純に是れ菩薩僧なり。或は仏土有り、菩薩声聞会して僧と為す。阿弥陀の安樂国等の如き是れなり、と。是れ声聞有る三の証なり。

〔解説〕また『大乘論』（智度論）に「いわれている。「仏土は種々あつて同じでない。ある仏土はもつぱら声聞僧だけがおり、ある仏土はもつぱら菩薩僧ばかりである。またある仏土は菩薩と



声聞とが集まって僧伽を形成している。たとえば阿弥陀仏の安楽国などがこれである」と。これは声聞が存在する第三の証である。

「諸經中有説安楽国処多言無声聞声聞即是二乘之一論言乃至無二乘名此云会」

「読み下し」 諸經の中に安楽国を説くこと有る処に、多く声聞有りと言のたまうて、声聞無しと言のたまわず。声聞は即ち是れ二乗の一なり。論に、乃至二乗の名無しと言いえり。此れ云何が会せんや。

「解説」 いろいろ經典で安楽国について説かれてはいる箇所には、多くの場合、声聞が存在すると言って、声聞が存在しないとはいっていない。声聞は即ち二乗の一つである。ところがこの論では「二乗の名さえない」といわれている。これはどのように理解したらいいのか。

考察..

『浄土論』の「大義門功德」に於いて天親菩薩は「大乘善根の堺等しくして憍嫌の名無し女人及び根欠・二乗の種は生ぜず」、安楽国、安楽浄土には「乃至二乗の名無しと言えり」（二乗の名さえない）といわれる。

しかし、曇鸞大師は『無量寿経』（大経）、龍樹菩薩の『十住毗婆沙論』、『大乘論』（智度論）の諸経には、「声聞が存在しないとは言っていないではないか」、声聞の存在を否定していないのにどうして天親菩薩が「二乗の名さえない」とおっしゃるのかとの問いが立てられた。

曇鸞大師がどうしてそのような問いを立てられたのか。

①曇鸞大師がその問いを立てることによって自ら出遇われ、明らかになったことを明確に表わしたいという意図がそこにあると思われる。

先ず、

○『大無量寿経』をひもとかれ、「二乗の名である声聞は浄土に存在している」と、『大経』に示されてあることを押さえられ、そのことを頂かれた天親菩薩が「二乗の名さえない」との真意は何か、という問いは、曇鸞大師が天親菩薩の「二乗の名さえない」との教えを通して明らかになられたことを、「問い」を立てること、天親菩薩の頂かれている浄土がどのようなところであるか

を明らかにすることが大事な意味、役割を持っているのではないか。

○具体的に挙げられた諸経…

・『大経』法蔵菩薩の四十八願の中の第十四願には「設い我仏を得んに国の中の声聞、よく計量有りて其の数をしらば正覚を取らじ」とある。

・『十住毗婆沙論』（龍樹菩薩）には、阿弥陀仏を讃える偈を作られ「三界の牢獄を超え出て」、目が蓮の花びら（目如蓮花葉）のような声聞の人々はかぎりなくおられる。だから、うやまうやまって礼拝する」とあると押さえられている。

【目如蓮花葉】とは、三十二相中、二十九番目の眼色如紺青相（真青眼相）。仏様の瞳は青く清らかさを表わし、我々を平等な目で見て、ありのままを受け入れてくださる、なんでも見透す眼であり、三十二相は仏以外の聖賢にも備わった相であるとされるから、今その三十二相の中の一つをあげて、浄土の声聞衆を讃嘆していると。

『智度論』巻四「真青眼の相、青蓮花の如し」とあるのがそれである」（袁輪先生解説）

・さらに、『大乘論』（智度論）があげられる。

「摩訶衍論」は『智度論』の通称で、摩訶衍は大乘のことであり大乘の論一般を意味し

『智度論』は大乘一般において重視されている、ものであると。

これらの諸経では声聞を否定していないと具体的な諸経をあげられ、天親菩薩は「二乗の名無し」といわれるそのお意とは何かを明確にする意味でこの問いを出されている、と思われる。

そして次の「答えて曰わく」へと続く

語句の意味…

一、**目如蓮花葉** 三十二相中の眼色如紺青相（真青眼相）をさす。『智度論』巻四に「真青眼相、青蓮花の如し」とあるがそれである。三十二相は仏以外の聖賢にも備わった相であるとされるか

ら、今はその三十二相の中の一つをあげて、浄土の声聞衆は讚嘆している。

二、**摩訶衍論** 『智度論』の通称。摩訶衍は大乗のことだから『摩訶衍論』は大乗の論一般を意味するが、『摩訶衍論』といえば、『智度論』をさすほど『智度論』は大乗一般において重視されている。



答曰以理推之安樂淨土不応有二乗何以言之夫有病則有藥理數之常也

法華經言釈迦牟尼如来以出五濁世故分一為三淨土既非五濁無三乘明矣

法華經導諸声聞是大於何而得解脫但離虛妄名為解脫是大実未得一切解脫以未得無上道故覈推此理阿羅漢既未得一切解脫必応有生此人更不生三界三界外除淨土更無生処是以唯応於淨土生

如言声聞者是他方声聞来生仍本名故稱為声聞如天帝釈生人中時姓僑尸迦後難為天主仏欲使人知其由来与帝釈語時猶稱僑尸迦其比類也

又此論但言二乗種不生謂安樂国不生二乗種子亦何妨二乗来生耶

譬如橋栽不生江北河洛菓肆亦見有橋又言鸚鵡不渡壘西趙魏架桁亦有鸚鵡此二物但言其種不渡彼有声聞亦如是作如是解經論則會

【読み下し】

答へてはいはく、理をもつてこれを推するに、安樂淨土には二乗あるべからず。なにをもつてこれをいふとならば、それ病あるにはすなはち藥あり。理數りしゆの常なり。

【現代語訳】

答え。道理から推せば、安樂淨土に二乗が存在するはずがない。なぜかと言えば、(二乗を墮すると  
いう)病があるからこそ、(それを消し去る)藥があるというのが自然の道理である。

○理數：自然の道理

【読み下し】

『法華経』(意)にのたまはく、「釈迦牟尼如来、五濁の世に出でたまへるをもつてのゆゑに、一を分ちて三みつとなす」と。浄土すでに五濁にあらざ。三乗なきことあきらかなり。

【現代語訳】

『法華経』にいわれている。「釈迦牟尼如来は五濁の世に出られたからこそ、一乗を三乗にわけて説かれたのである」(方便品)と。浄土はすでに五濁ではないのだから三乗がないことは明らかである。

○三乗：声聞乗縁覚乗菩薩乗の三種の教法

【読み下し】

『法華経』(意)に導く、「もろもろの声聞、この人何においてか解脱を得ん。ただ虚妄を離るるを名づけて解脱となす。この人実にいまだ一切解脱を得ず。いまだ無上道を得ざるをもつてのゆゑなり」と。覈あひらにこの理を推するに、阿羅漢すでにいまだ一切解脱を得ず。かならず生しよ有るべし。この人更かえりて三界に生ぜず。三界のほか、浄土を除きて更生またしよ処なし。ここをもつて唯ただ浄土に生ずべし。

【現代語訳】

『法華経』にいわれている「声聞の人々はどういう点で解脱を得ているのか。ただ虚妄を離れることを名づけてとする。この人は本当はまだ一切のものからの解脱を得ていない。いまだこの上ないさとりには達していないからである。」(譬喩品)と。しらべてはつきりこの理をおせば、声聞のさとりである阿羅漢は、まだ一切のものからの解脱を得ていない。必ず生まれるというのがあるはずである。この人は再び三界に生まれることはない。三界の外に浄土を除いて再び生まれるべきところはない。だからひとえに浄土にうまれるしかないのである。

○無上道：この上ないさとり。最高のさとり。

○未得無上道：声聞は三界の惑たる見思惑を断じて分断生死を離れたが、それだけではいまだ仏道の究極たる大涅槃をえたことにはならないから。

○生処：生まれるべきところ。

○阿羅漢：声聞などの小乗におけるさとの究極。学ぶべきことをすべて学びおわった位なので無学果ともいう。

### 【疑問】

1, 「阿羅漢すでにいまだ一切解脱を得ず。かならず生有るべし。」というのは、必ず涅槃に生まれるという正定聚と同じ事なのででしょうか？

### 【読み下し】

「声聞」といふごときは、これ他方の声聞来生せるを、本名に仍よるがゆゑに称して声聞となす。天帝釈の人中に生るる時、驕戸迦きよしかを姓とせり。後に天主となるといへども、仏（釈尊）、人をしてその由来を知らしめんと欲して、帝釈と語らひたまふ時、なほ驕戸迦と称するがごとし。それこの類なり。

### 【現代語訳】

「声聞」と先ほどから言っているのは、他方の世界の声聞が浄土の来り生まれるのを、もとの名によるから声聞と呼んでいるのである。たとえば帝釈天は、昔人間の世界生まれた時、姓を驕戸迦と言ったが、後に天上の主となっても、釈尊は人々にその由来を知らせようと欲おもわれ、帝釈天と語られる時は、なお驕戸迦と呼ばれたようなものである。これもこの類たぐいである。

○仍よる…もとのままにしたがう

○天帝釈…古代インドにおける征服者アーリア人の特徴をそなえた軍神。暴飲暴食を好み、金剛杖をもち、勇敢に天界を統治する天で、インドの代表神となっている。仏教に入って護法の主神とされ、須弥山の頂上の忉利に住するという。

### 【疑問】

2, 「本名に仍よるがゆゑに称して声聞となす。」とは、浄土に生ずものは自分の本名が声聞だと本当に分かっているということなのだろうか？

### 【読み下し】

またこの『論』（浄土論）には但ただ「二乗種不生」といへり。いはく安楽国に二乗の種子を生ぜずとなり。また何ぞ二乗の来生を妨まげげんや。

たとへば橘を栽うえて江北かうほくに生なぜざれども、河洛からくの菓肆かしにまた橘ありと見るがごとし。また鸚鵡おうむは壟西りやうせいを渡わたらざれども、趙魏ちやうぎの架桁かこうにまた鸚鵡ありといふ。この二の物、ただその種たねを彼かしこに渡わたさずといふ。声聞しやうもんの有あることまたかくのごとし。

かくのごとき解なまを作なば、経論しやうろん則すなわち会あしぬ。

### 【現代語訳】

またこの『論』(浄土論)には但ただ「二乗の種は生じない」とだけいわれている。つまり安樂国では二乗の種子は芽を出さないとするのである。どうして二乗の来りて生まれることまでこぼむことがあろうか。

たとえば橘の樹を植えて、江北には生じないが、(その江北の地である)洛陽のくだもの店には、橘があるようなものである。またオウムは壟西りやうせいより(東へは)渡らないが、趙ちやうや魏ぎの鳥かごのつまり木にはまたオウムがいるという。この二つのもの(橘とオウム)、ただその種がむこうに渡らなというのである。声聞が存在するといふのもこのようなものである。このように理解すれば、経と論とは会通するものである。

○二乗種不生にじやうしゆふしやう…真宗学の一論題。天親菩薩の浄土論には『大乘善根界だいじやうぜんこんかい 等無譏嫌名とうむきげんみやう 女人及にょにんぎやう根欠こんけつ 二乗種不生にじやうしゆふしやう』とある。これは阿弥陀如来の安樂浄土は大乗善根界なるが故に、声聞縁覚の二乗の種は生ぜずといふのである。…然るに曇鸞大師の解釈は異なつて、種の字を種姓、生の字を往生と解釈してない。…種を種子とし、生を發生の義としてある。そこで二乗種不生とは二乗は安樂浄土に往生せずという意味ではない、二乗の人々も彼の浄土に往生することを得れども、既に往生したる上は再び二乗の種子が発生せぬことを示して「二乗種不生」と説いたのであると解釈せしは鸞師の説である。…(真宗大辞典)

### ○橘…柑橘類の総称

○江北…江蘇省北部の地。広義で長江(揚子江)より北の地域。

○河洛…黄河と洛水にはさまれた流域。具体的には洛陽の都

○菓肆…くだものを売る店のこと。

○架桁…鳥かごのとまり木。

○会する…会通すること。一見矛盾したように見える記述を道理に照らしあわせて、趣意の一貫したものと説明すること。

### 【考察】

『論』（浄土論）には但ただ「二乗の種は生じない」とだけいわれているのに、ここでわざわざ二乗が来ることをこぼさない、と言われる。救われ難い二乗に、門を開くことの大切さを言われているのだろうか？本願の18願、唯除の文に通ずるお心なのだろうか？

門は（要門・真門）と、それぞれの衆生に即した門を作られ、全ての人を浄土に生きる者たらしめ、そこで二乗の芽吹きや成長のない世界を願われたという事なのか？

### 【感想】

もつとも救われがたい者も、一人一人に合わせた救われる門が整えられているということ。「どうかこの門をたたいてくれ」「入ってくれ」との願いを感じます。私に寄り添って下さり、そして歩ましめられるはたらきを回向されていることに驚きと感謝を感じます。

（担当 金榊順子）